

# 長者・旅所・政所——神幸祭成立の諸相

福原敏男

はじめに

祇園社の事例

日吉社の事例

松尾社の事例

大山崎の事例

宇治の事例

稻荷社の事例

許波多神社の事例

向日社の事例

長者と祭政

おわりに

論文要旨

一年間で最も大事な祭の時に、多くの場合、神は御旅所や頭屋家に神幸し、駐輦ののち、本社に還幸する。本稿は、現在定型化している神幸祭がいつ、どのようにして形を整えていったのかを課題にする。なかでも、京都府・滋賀県に多い、春の神幸祭を対象に問題を設定する。

京都及びその周辺の古社の祭で、神幸の御旅所を大政所、政所と称する事例がある。大政所や政所は在地において神を祀る拠点であり、そこには御旅所神主、長者とよばれる人々が宮座的祭祀集団の長として神を迎えていた。御旅所は神の鎮座伝承のなかで、祭場に鎮まる途上の一時的な逗留所と縁起に記される事例がある。その場合、祭は鎮座の復演、反復の意味を有し、縁起（神話）と相互補完になる。その他の場合も、御旅所は神の出自と不可分な意味をもち、神顯現に重要なかかわりをもつ。御旅所神主や長者は、神主として、あるいは本社より頭役を差定された頭人として、在地における祭の中心で

あった。近畿における中世の開発長者で、長者職を独占・世襲化することにより、祭祀の神主をも神主職として独占・世襲化し、村落の祭政を統べていた事例がある。御旅所神主、長者は、司祭者・舗設者であるとともに、長者の命脈が保たれていた中世的祭祀世界を前提として理解されなければならない。

本稿で取り上げる日吉・大山崎・稻荷・宇治・松尾・向日の祭は四月を中心とした春祭であり、平安より中世にかけて祭式を整えた。本稿で論じた以外にも、京・滋の古社は春祭が多い。京・滋を中心とした村落の神幸祭は、中央古社の祭式が直接・間接に伝播したものであると考えられる。また、寺社領の莊園鎮守社祭祀として、本所の祭祀形態が伝播することもあったであろう。それが土着し、その土地なりの意味が付与されて祭式も多様化し、民俗化していくのである。